http://www.edu.pref.kagoshima.jp/　（通巻第２０６４号）

指導資料

鹿児島県総合教育センター
令和３年４月発行

校内研修　第９号

対象校種	小学校　中学校　高等学校 義務教育学校　特別支援学校

新たな時代において「学び続ける教職員集団」を目指す授業研究の在り方に関する一考察

「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（令和３年１月 26 日 答申）」が示されたのに伴い，教職員集団の持続的な成長を目指す研修の在り方についても議論され始めている。本稿では，校内研修の中でも授業研究はどのようにあればよいのかについて考察する。

１　「学び続ける教職員集団」の重要性

(1)　国の教育動向から

中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して(令和３年１月 26 日答申)」では,「教職生涯を通じて探究心を持ちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け」ている教職員の姿を，児童生徒の伴走者と表現し，学び続けることの大切さを説いている。

この議論の中では，教職員集団の持続的な成長に着目し,「学び続ける教職員集団」について，次の３点に整理している。

- 「教師同士の学び合い」の文化をつくり，教師それぞれの強みや専門性を引き出し，相互にかけ合わせることで,集団の力を最大限に高めていくこと。
- 学校の教育課題に即した校内研修や授業研究などの日常的かつ組織的な学びを実践すること。
- 安心して建設的な批判や助言，提案を行うことができる校内環境を整え,職場での対話や連携協働による問題解決が促進されるような学校組織マネジメントを行うこと。

(2)　県の実態から

県内の教職員の多くが授業力の向上を願っており，各学校で授業研究が行われている。

当センターではその充実のためには，協働的な授業研究を取り入れた校内研修が有効であると考え，これまで，ワークショップ型授業研究の普及・啓発を図ってきた。

平成 22 年に,当センターのプロジェクト研究をスタートさせる際の実態調査では，授業研究の課題として,「全員が意見を述べ合う活発な授業研究」が挙げられていたが，本年度の県内公立小・中学校の校内研修に関する実態調査（県教育庁義務教育課）によると，ほとんどの学校でワークショップ型の授業研究を取り入れている。

しかし，多くの授業研究がワークショップ型になってきているものの，その成果が，児童生徒の学力向上や教職員の資質向上等につながっているかどうかについては十分とは言えない。研修の目的は,「職務の遂行」つまり「児童生徒の資質・能力の向上」にあると考えると，授業研究が形骸化している可能性が考えられる。

県教育庁義務教育課では，このような現状を踏まえ,これまでの施策と関連付けながら,令和３年度から「コア・スクールプロジェク

ト事業」をスタートさせ，当センターとも連携し，授業研究の充実を図り，学力向上に資する授業改善を進めている。本事業には，廣瀬(2019)による，Instructional Rounds(インストラクショナル・ラウンズ，以下ＩＲと表記）の考え方が取り入れられている。当センターも短期研修講座（移動講座）でＩＲの考え方を取り入れ，「子供の学びの姿」に着目した授業研究を行い，校内研修の充実に資するように取り組んでいる。

２　学び続ける教職員集団を目指す授業研究

では，ＩＲの考え方はどのようなもので，学び続ける教職員集団を目指す授業研究とどのように関連しているのだろうか。まずは，ＩＲの概要と授業研究における留意点について述べる。

廣瀬（2019）によると，ＩＲは，そもそも「ハーバード大学の研究者らが中心となり，医者の臨床的な学びの仕組みを参考にして開発した仕組み」であり，「学校や教室をつなぎ，訪問者が授業やその研究を通して学び合うことに理論の焦点がある」と述べている。

また，ＩＲのシステムについては，以下のような特徴がある（**図１**）。

○　教育委員会と数多くの学校がネットワークを組む。複数（３~４）の学校がチームを組み，ブロック内で互いの学校を訪問し合う。
○　複数の授業を観察・分析し、授業改善を提言し合う。
○　授業観察は，インストラクショナル・コア（Instructional Core）である，教職員・子供・内容とその相互作用に焦点が置かれる。

図１　ＩＲのシステムの特徴

ＩＲが複数の学校をブロックとして相互に学校を訪問して授業観察を行うことを前提としているので，教育委員会単位で，「育みたい児童生徒の姿」や「主な取組」を共有しておく必要がある。また，それに基づき，「ブロック共通課題」や「各学校研究テーマ」を設定しておく必要がある（**図２**）。

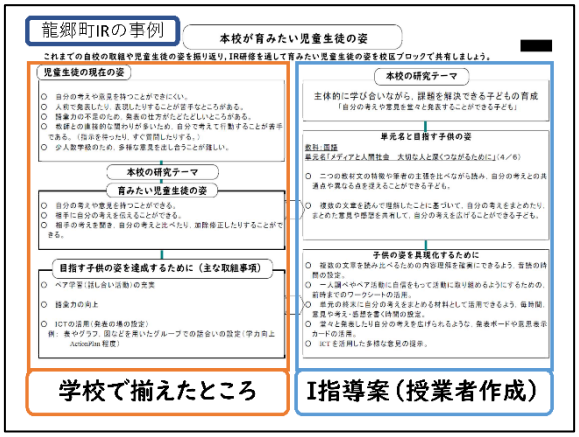


図２　育みたい児童生徒の姿等（龍郷町の例）

さらに，授業観察の際は，**図３**にあるように，ある授業内容の下に展開された子供の活動と教職員の言動，学習内容の相互作用に注目し，記述・分析することとしている。

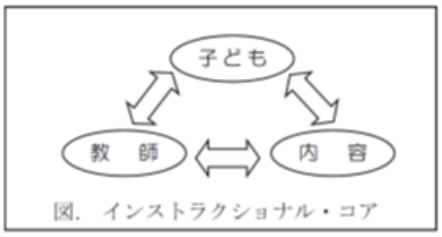


図３　授業の中核（インストラクショナル・コア）

従来の授業研究のシステムと比べ，学び続ける教職員集団を単独の学校をベースにして考えるのではなく，複数の学校で育みたい児童生徒の姿を明らかにし，協働して授業研究を行う点が異なっている。また，これまで教職員の指導技術や手立てに偏りがちだった授業の記録・分析を，「子供の学びの姿」に着目し，教職員の言動と学習内容の相互作用を中心に据えようとしていることも従来と異なっている。

３　学び続ける教職員集団を目指す授業研究の実際

実際の授業研究におけるＩＲを実施する上でのポイントは，「授業観察」，「授業分析」，「今後の展望」の３点である。

まず，授業観察の際は，前述のとおり授業の中核に注目する。子供の発言や行ったことの事実，教職員の発言や行ったことの事実，学習課題や活動内容の事実の３点である。観察記録の際は，「～だと思う。」，「楽しそうに学習していた。」，「～すべきだった。」などの主観的な表現を排し，客観的に記録する必要がある。

次に，授業分析の際は，学校の実践上の課題や目指している子供の姿などの情報を確認した上で，授業記録を付箋に書き出し，模造紙上で共有しながら授業の事実を確認する。その際，目指している子供の姿に迫れているか，その背景に関連する付箋を類型化する。また，迫れていなかった子供の姿も類型化する。分析の最後の方では，子供の立場になって，「何が分かり，何ができたか。」，「どのような手立てがあったら目指す子供の姿に迫ることができたのだろうか。」などについて推測しながら話し合う。

最後に，分析したことについて協議し，今後の展望としてどうすれば改善されるのか，短期的・長期的に提言できるようにする。

図４は，実際の授業研究の流れをこれまで当センターで実施した短期研修講座（移動講座）に基づいてまとめたものである。

	研修の主な流れ	分	実施上の留意点
1	授業を観察し，ワークシートに記録する。（研究授業参観）	20～50	○　授業観察は，授業の中核に注目する。 ○　授業の中核（子供の言ったことや行ったことの事実，教師が言ったことや行ったことの事実，学習課題や活動内容の事実）を記録する。 ○　観察時の注意事項（どこで観察すれば，事実を捉えられるか。）
2	情報を確認する。 	10	A　学校の実践上の課題は何か（学校レベルで解決に取り組みたいこと） B　目指している子供の姿は何か（解決したい（された）子供の姿） C　子供の姿へのアプローチ（行動の論理）は何か（解決策の見通し） ※　その他，学校で取り組んでいることや課題，授業者の思いや願い，悩みなど。
3	観察記録を確認する。（事実の確認） 	30	①　２のA，B，Cに関連する関連する授業の記録（データ）を観察ワークシートから選び，付箋に書き起こす（付箋は後から加筆できる）。 （色分け例）赤：教師，青：子供，黄：内容 ・　付箋の内容が推測になっていないか？ ・　評価的（価値判断的）になっていないか？ ②　グループで模造紙等に附箋を貼って，観察結果を共有する。
4	データの整理分析をする。 	50	①　観察記録（青い付箋）を基に，Bに迫ることができていた姿（○）と迫ることができていなかった姿（△）とを確認する。 ②　迫ることができていた子供の姿を共有し，類型化する。 例）「○○と書いていた」や「××と伝えていた」など ➡類型化例：Aの関係について表現している子供の姿 ②　迫ることができていた背景に関連する付箋を共有し，類型化する。 （類型例）課題設定の手順（☆），学習のルール（◇），または☆や◇の関係構造等 ④　迫ることができていなかった子供の姿を類型化する。 例）「何をするの？」や「ノートを写させて」など ➡類型化例：目的をつかめていなかった子供の姿等々

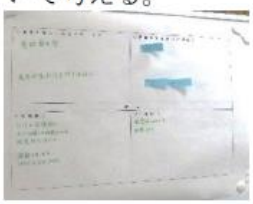
5	子供の立場に立って考え推測する。 	40	感情面も含めて子供になりきり，以下の問いについて考え話し合う。 例）「もし自分が子供だったら，今日，何が分かり，できるようになっただろうか。また，何を必要としただろうか。」 ① （上記２の③）とＣ子供の姿へのアプローチを比べて，Ｃについて検証し，加除修正する。 ② 必要に応じて，子供の姿へのアプローチ（行動の論理）の加除修正をする。 ③ 感情面も含めて子供になりきり，必要な手立てや支援，配慮について，直接的な声掛けや発問といった指導や，環境設定といった間接的な指導等まで含めて考える。
6	今後の取り組みについて考える。 	20	・ 協議を踏まえて今後の展望を考える。 ・ 提言や共通実践事項（短期，長期） ※ 提言用ワークシートは大判印刷にしたり，模造紙に線を引いたりする。 【提言用ワークシート例（右図）】
7	まとめ	10	・ 共通実践事項等を踏まえ，研修の指導助言者や担当がまとめる。

図４　児童生徒の学びの姿に着目した授業研究の流れ（取組例）

講座に参加した受講者の反応は，次のようなものであった。

> ○　子供の困り感について，その立場に立って考え，改善策を考えることができた。
> ○　これまで子供の事実のみに着目して授業研究をしていなかったので参考になった。
> ○　一見すると課題と思える子供の姿も成果につながることに驚いた。

子供の学びの事実に寄り添って，授業を観察・分析し，展望までもつことができたことについて，これまで行ってきた授業研究とは異なる充足感を得られたという意見が多く見られた。

なお，**図４**に示した授業研究の流れは，講座として実施しているもので，２～３時間要しているが，各校の校内研修で実施する場合は，90分間前後の時間確保で実施可能になると思われる。その場合は，授業参観の時点で付箋を色分けして記録したり，校内の児童生徒理解が進んでいる分，データ分析や推測などの時間を短縮したりするなどして，工夫しながら取り組むとよいのではないか。

４　おわりに

子供の学びの姿（事実）に着目した授業研究は，子供の資質・能力を伸ばし，授業研究に参加した教職員の学び続ける意欲につながることを受講者の感想などから実感している。各学校で実施することにより「教職員同士の学び合い」文化の醸成や，ひいては新たな時代における「学び続ける教職員集団づくり」に資するのではないかと期待している。

－参考文献－

○　新たな時代における教師・教職員集団の持続的な成長の在り方について（概要），第 131 回中央教育審議会初等中等教育分科会，令和３年７月８日開催
○　大阪市立大学教育学会教育学論集４（通号 41）「新たな専門的な学習共同体のネットワーク化としての Instructional Rounds－授業分析に基づいた学区の教育及び学校改革－」，2015 年，鹿児島大学教育学部　廣瀬真琴他
○　鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編「Instructional Rounds の日本における試行と評価」，2019 年，鹿児島大学教育学部，廣瀬真琴，森久佳，宮橋小百合

（企画課　宮内隆靖）

※　令和４年３月一部改稿